ヒメマスよかえれ！

鈴木喜代春＝作●坂口利夫＝絵

作者・画家のしょうかい

鈴木喜代春（すずき・きよはる）

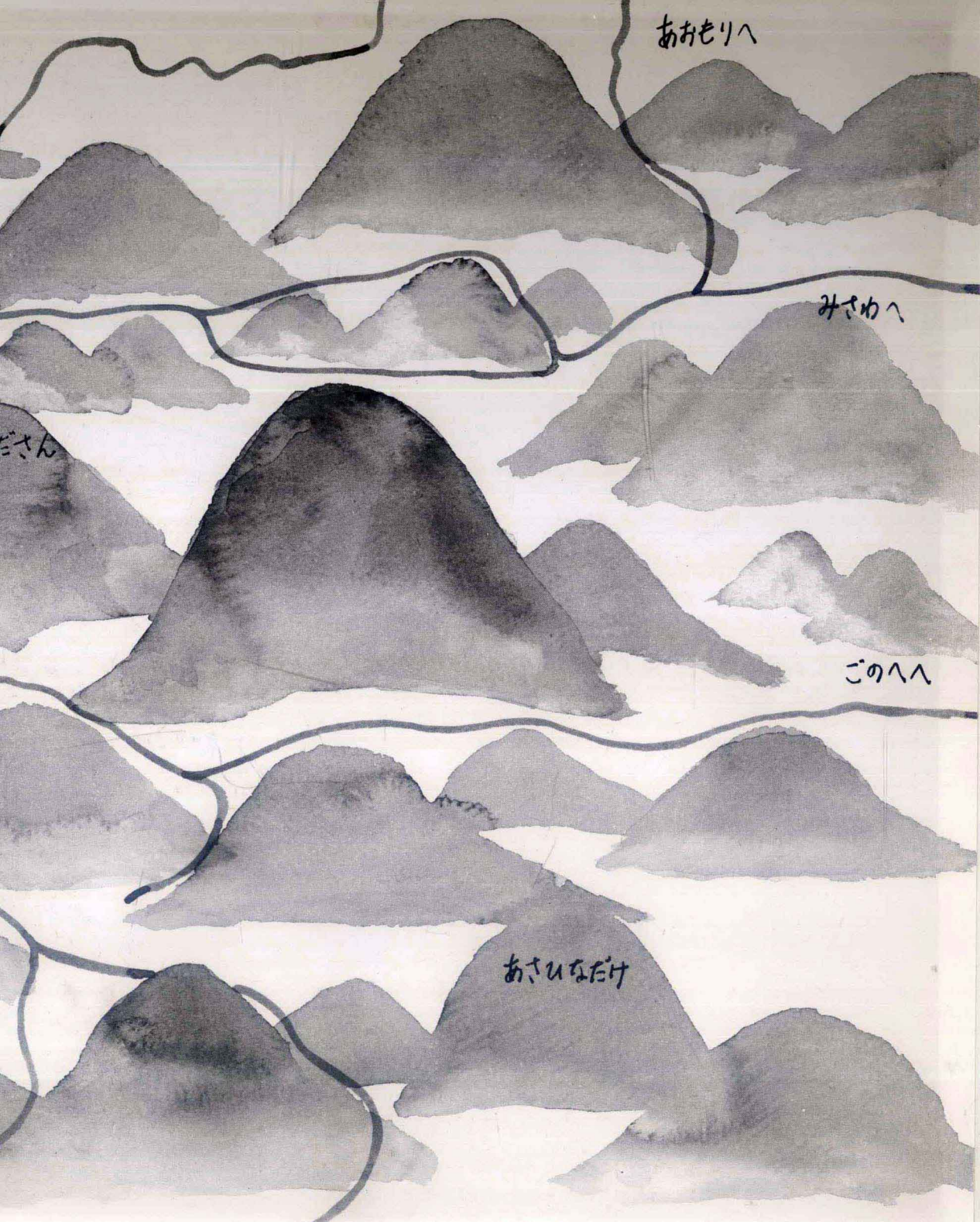
1925年、青森県に生まれる。
青森師範学校卒業。
青森県、千葉県の小・中学校教師、松戸市教育研究所長を歴任。現在松戸市立松飛台小学校長。
日本児童文学者協会々員。主な著書に「北風の子」（理論社）、「白い河」（三部作・牧書店）、「二つの川」（ポプラ社）、「十三湖のばば」（偕成社）等。
現住所＝東京都葛飾区東金町３-41-29

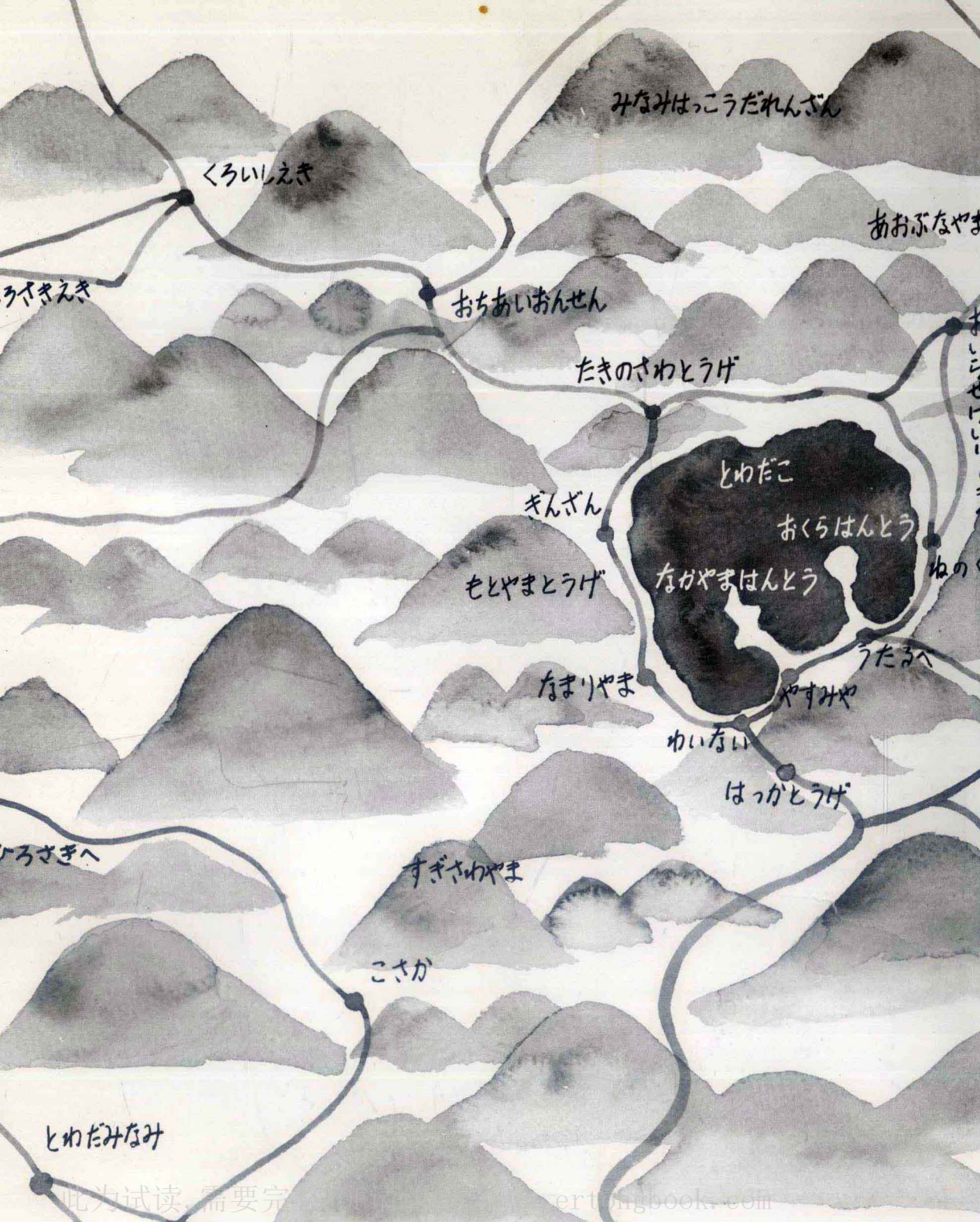
坂口利夫（さかぐち・としを）

1940年東京都中野区に生まれる。
武蔵野美術大学油絵科卒業。
グラフィックデザインの仕事のかたわら、私の心象風景を、童話の世界をとおして表現していきたいと考えています。
現住所＝横浜市港南区上大岡東1-14-1 竹川方

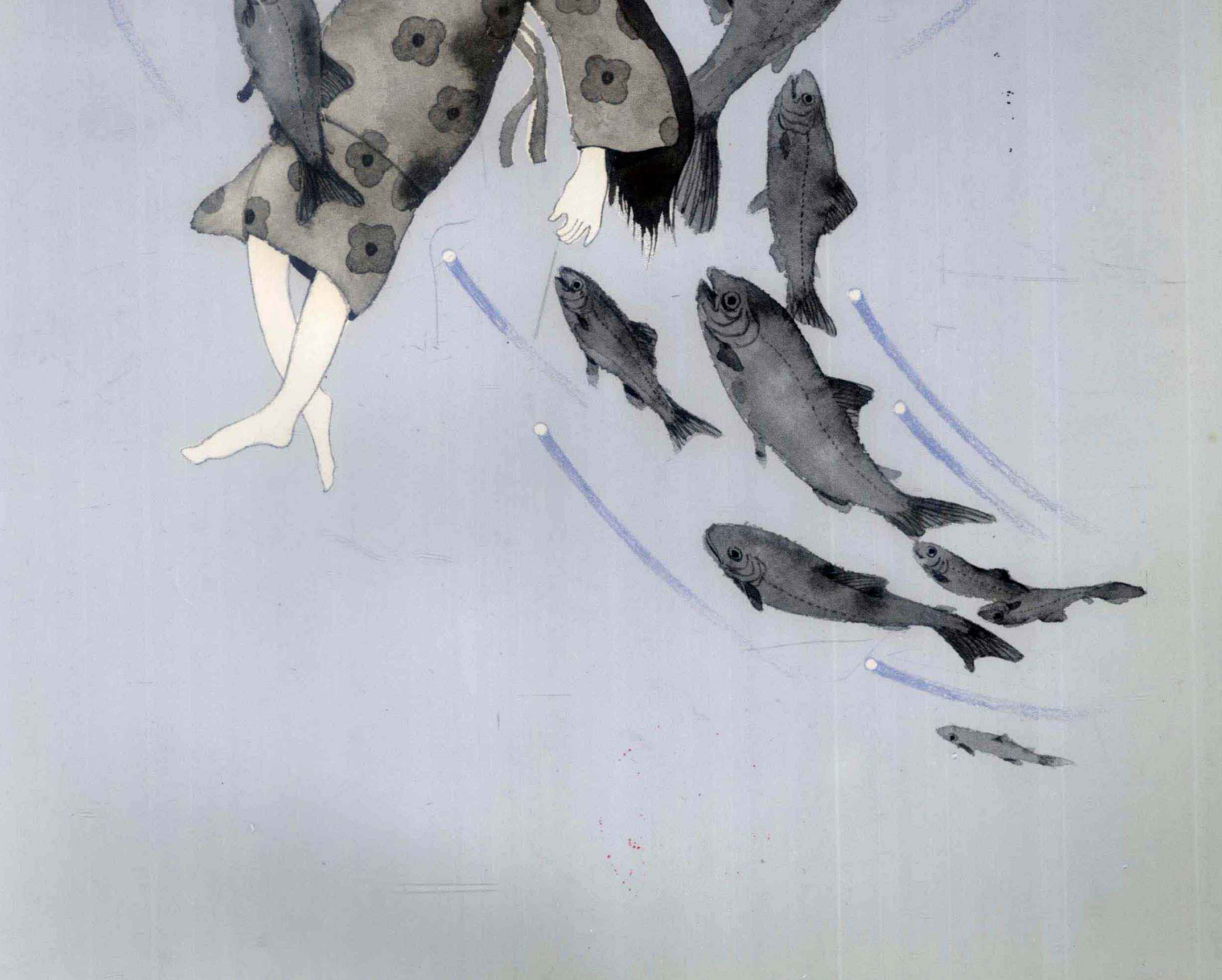
ヒメマスよ かえれ！

鈴木喜代春＝作●坂口利夫＝絵


あおもりへ
みさわへ
ださん
ごのへへ
あさひなだけ



此为试读，需要完 ertongbook.com



鈴木喜代春＝作

ヒメマスよ かえれ！

坂口利夫＝絵

それでは、やくそくの十和田湖のキラキラのお話をはじめよう。

キラキラというのは、十和田湖のヒメマスのことだ。ヒメマスは、キラキラと光る。だから、十和田湖の人たちは、キラキラとよんでいるんだよ。

いまは、十和田湖から、キラキラと光るヒメマスが、たくさんとれるが、むかしは一ぴきの魚も、十和田湖にはいなかった。いたのは、はらのあかいイモリだけだったんだよ。

なに？　一ぴきも魚のいなかった十和田湖から、どうして、たくさんのキラキラがとれるようになったのかって――。

それは、おゆきという女の子が、たくさんのキラキラを、十和田湖へつれてきたからだといわれているんだ。

＊

おゆきは、その名まえのように、色のまっしろな、かわいいこどもだったということだ。目がたれさがって、いつも泣いているようなかおつきだったという。小さな口もとが、ちょこんとむくれており、まっ白な右のほほには、

ぽとんとすみをおとしたように、まっくろなほくろがあったということだ。
かみは、うしろでたばねられ、せなかまでたれさがっていたという。
口もきかない、おとなしいこどもだったそうだ。
なに？　そんな小さな、おとなしい女の子が、どうして、たくさんのキラキラをつれてきたのかって――。はいはい、これからゆっくり、そのお話をしてあげるから、ようくきいてくれや。このばばは、みんなに、むかし話をしてやるのが、なによりのたのしみなんじゃよ。

*

まず、おゆきの家のことから話そうな。
おゆきの家は、十和田湖のほとりの、銀山というところにあったんだ。
むかしむかし、十和田湖のほとりには、銀や銅や鉛の脈が、地面の底をはしっていて、その銀や銅や鉛が、そちこちの山はだに、かおをだしていたんだ。それで、その銀や銅や鉛をほるために、たくさんの人びとが、山ふかい十和田湖あたりまで、はいりこんできたんだよ。
十和田湖のほとりの銀山にも、たくさんの銀がうずまっていてな、その銀をほりだすために、たくさんの人びとが、そこへあつまってきたのさ。あつ

まってきた人たちが、そこを銀山とよんだんだ。

銀山には、銀をあらいだす大きな仕事場ができ、銀をほりだす人びとの住む家が、たちならんだ。そのころ、谷川をはさんで、せまい銀山の谷間には、二千人もの人が住んでいたというんだよ。

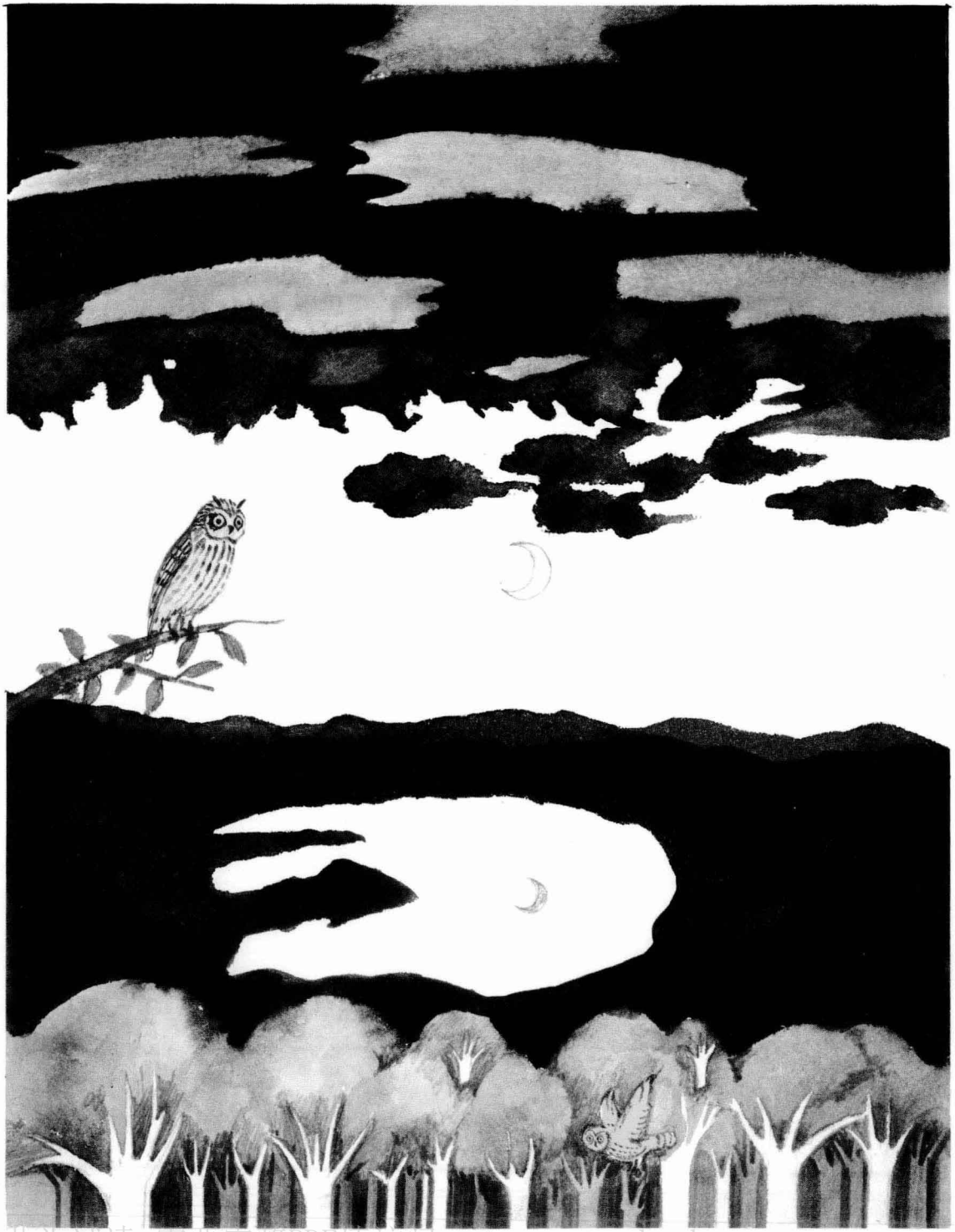
銀をほりだす人びとが、銀山にあふれると、いままでは人の住んでいなかった、山おくの十和田湖のそちこちにも、人が住むようになってな、銀山にものをはこんだり、あれ地をかいこんしたりして、くらすようになったんだ。

宇樽部と休屋は、御倉半島と中山半島のつけ根のところにあって、そこは、けわしい山にかこまれた十和田湖にはめずらしく、ちいさな川も流れており、せまい平地がひらけていた。そのせまい平地に、三人、四人と住みつく。

子の口は、十和田湖の水があふれて、奥入瀬川となって流れていく川口だが、ここにも人が住みつく。子の口の北の青橅にも、人が住むようになった。

いままで、ひっそりとしていた山おくの十和田湖にも、こうして、ようやく人びとのくらしのけむりが、そちこちから、たちのぼるようになったというわけだ。

*



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

おゆきの父の勘助は、銀をほるために、ほかのおおぜいの人びとともに、銀山にはいってきたのさ。

勘助は、妻のおさととふたりで、せっせと銀をほったんだよ。

*

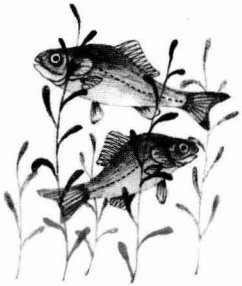
勘助とおなじように、銀をほるために銀山にはいってきたおおぜいの人びとのなかに、和井内貞行という人もいたんだ。なに？　その和井内貞行が、キラキラと、どんなつながりがあるのかって――。

和井内貞行ってのは、たまごからかえったばかりの小さなキラキラの子っこを、はじめて十和田湖に、放してやった人なんだよ。

貞行は、銀山で、銀をほるしごとをしながら、まいにちまいにち、十和田湖をながめては、どうしてこのひろくふかいみずうみに、魚が一ぴきもいないのか、と、かんがえこんだんだよ。

みれば、しずかで、ひろくて、うつくしいみずうみだ。そのみずうみで、およいでいるものといったら、はらのあかいイモリだけ。一ぴきのフナも、一ぴきのイワナもいないという。それじゃ、死んだみずうみではないか。お

かしなことだ、と、貞行はかんがえたのだよ。
そして貞行は、ようし、この死んだみずうみを生きたみずうみにしよう、一ぴきの魚もいないみずうみを、魚がむれをつくっておよぐみずうみにしようと、心にきめたのさ。



*

さっそく、貞行は、フナやコイの子っこを買ってきて、十和田湖に放してやった。そうしたら、十和田湖のまわりに住んでいる人たちは、貞行は気がくるった、青竜権現様のばちがあたるぞ、と、さわぎだしたんだよ。
十和田湖に、一ぴきの魚もいないのは、青竜権現様という神様の住む、というみずうみだからという、いいつたえが、ずっとむかしからあったんだよ。だから、十和田湖では、魚の話をしただけでも、青竜権現様のばちがあたるといわれていたんだ。
そのような、いいつたえのある十和田湖に、魚の子っこを放したのだから、さあ、たいへん。気ちがいだ、ばちあたりだ、と、あたりの人たちはおおさわぎをはじめた。

しかし、そんな悪口など耳にもいれないで、貞行は、フナやコイの子っこたちに、「おおきくなってかえってこいよ」といいふくめては、青いみずうみに放してやったのさ。

フナやコイの子っこは、ぴくぴくっとからだをふっては、ふかくひろいみずうみに、すいこまれていった。

*

なに？　和井内貞行のまえに、十和田湖に魚を放した人が、いなかったのかって――。

それは、いたよ。

なんぼ、青竜権現様のいいつたえがあるといっても、ひろいふかいみずうみを、死んだみずうみにしておくことは、さびしいことだろう。だれもが、ぴちぴちとした魚の、むらがりおよぐみずうみにしたいものだと、思ったんだな。

まだ十和田湖のそちこちに、人が住みつかない、ずっとむかしのさむらいの世の中のころ、そのあたりにはいった角久平という人が、イワナを十和田湖に放したんだよ。これが、十和田湖に魚を放したはじめだ。

それから、明治の世の中になって、吉田藤吉という人がイワナを、飯岡政治という人がコイとフナを、三浦泉八という人がコイとイワナを、それぞれ十和田湖へ放した。……そして、これらの人びとにつづいて、和井内貞行が、コイを放したというわけだ。

貞行がコイを放してからも、すぐそのあとに、飯岡政徳という人がコイを放し、三浦泉八がフナとシジミ貝を放しているんだよ。

だれもかれもが、死んだみずうみを生きたみずうみにしようと、いっしょうけんめいだったわけさ。

ところがな、こんなに放した魚が、どこへいったものか、さっぱりすがたをみせないのだよ。

貞行も、まいにち、みずうみの岸にたって、じっと湖面をみつめたものだ。でも、フナのすがたも、コイのすがたもみあたらない。みえるのは、チラチラと、ときどきあかいはらをひっくりかえしておよぐ、イモリだけなのさ。

なんぼ、魚を放しても、なんもかわったようすのあらわれない十和田湖だ。もえるようなみどりにつつまれ、きりたった山やまにかこまれて、十和田湖は、いつまでもしずまりかえっているだけだ。

しかし、なんも、かわりのない十和田湖のようにみえてはいても、人びとの、けんめいのはたらきかけによって、ほんとうは、すこしずつ、かわっていたんだよ。

なに？　どうかわっていたかって――。

ある日のことだ。宇樽部に住んでいた炭やき男が、みずうみのへりの道をあるいていた。一日のしごともおわって、お日さまが、むかいがわの元山峠へ、いまにもしずもうとしていた。みずうみの水は、あかくそまっていた。

とつぜん、ぼしゃんと、みずうみから音がきこえてきたんだ。そして、あかくそまった湖面に、水しぶきがあがった。

炭やき男は、どってんして声をあげた。その男は、はっきりと自分の目で、一尺余（30センチ以上）もあるコイがおどりあがったのをみたんだよ。

イモリしかいない十和田湖で、コイがおどりあがったんだ。炭やき男は、コイだ、コイだ、とさがんで、村へはしっていって、みんなにはなした。話は、たちまちみずうみのまわりに住む人たちのあいだにひろがっていった。

銀山にいる和井内貞行の耳にもはいった。

貞行も、そしてみずうみのまわりに住む人びとも、放した魚はきっとおお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com